

# 実盛詞章

## 登場人物

前シテ・老人 後シテ・斎藤実盛の霊  
ワキ・旅僧 ワキ連・徒僧 間狂言・篠原の里人

ワキ それ西方は十万億土。遠く生るる道ながら。

ワキ連 ここも己身の弥陀の国。

ワキ 貴賤群集の称名の声。

ワキ連 日々夜々の法の場。

ワキ げにも真に撰取不捨の。

ワキ連 誓に誰か。

ワキ 残るべき。

ワ・連 独りなほ仏の御名を尋ねみん。仏の御名（みな）を尋ねみん。各々歸る法の場。知るも知らぬも心引く誓の網に漏るべきや。知る人も知らぬ人も渡さばや。彼の国へ行く法の舟。浮むも安き道とかや。浮むも安き道とかや。

シテ 笙歌（せいが）遙に聴う孤雲の上。聖衆来迎す落日の前。あらたふとや今日も亦紫雲の立つて候。いかに人々。日中の称名ははや近づきて候か。や。鐘の音念仏の声の聞え候。さなきだに立居苦しき老の波の寄りもつかずは聴衆の場に。よそながらもや聴聞せん。一念称名の声のうちには。撰取の光明雲らねども。老眼の通路猶以て辿る。よしよしさのみは急がずとも。ここを去ること遠かるまじや。南無阿弥陀仏

ワキ いかに翁。

シテ 御前に候。

ワキ さても此程日中の称名に一日も怠ること無し。されば志の人と見る所に。翁の姿を余人の見る事無し。誰に向つて何事を申すなど皆人不審し合へり。今日は翁の名を名宣り候へ。

シテ これは思の外なる仰かな。もとより此の身は天さがる。鄙人なれば人がましう名も有らばこそ名宣りもせめ。唯上人の御下向。即ち弥陀の来迎なれば。畏（かしこ）うぞ長生して。此の称名の時節に遇ふ事。盲亀の浮木優曇華の花待ち得たる心ちして。老の幸身に越え悦の涙袂に余る。されば此の身ながら。安楽国に生るるか。無比の歓喜をなす所に。輪廻妄執の閻浮の名を。又更めて名宣らん事。口惜しうこそ候へ。

ワキ げにげに翁の申すところ理（ことわり）至極せりさりながら。一つは懺悔の廻心たるべし。唯包まず名を名宣り候へ。

シテ 何と名を名宣れ。

ワキ なかなかの事。

シテ さあらば御前の人を退けられ候へ。

ワキ もとより翁の姿を餘人の見る事は無けれども。所望ならば人をば退くべし。近う寄つて名宣り候へ。

シテ 昔長井の斎藤別当実盛と申しし人は。此の篠原の合戦に討たれて候。定めて聞こし召し及ばれてこそ候らめ。

ワキ それは平家の侍隠れ無き弓取。いや其の軍物語は無益。唯翁の名を名宣り候へ。

西方||極楽浄土  
十万億土||十万億里  
の彼方にあるとされる。

ここも己心の弥陀の  
国||阿弥陀仏も極楽  
浄土も我が心の内に  
あるものでこの場も  
阿弥陀の極楽世界で  
あるとの意味。

撰取不捨||阿弥陀仏  
が全ての衆生を浄土  
に迎え、誰も見捨て  
ないこと。

独りなほ仏の御名を  
||一遍上人の詠であ  
るとされる。

笙歌遙に聴う||次の  
句と併せて大江定元  
(寂照) 臨終の際の  
詩句。極楽の様を現  
す。

盲亀の浮木優曇華の  
花||極めて稀な、容  
易ならぬ事の喩え。

輪廻妄執の閻浮の名  
||この世での名前。

懺悔の廻心||懺悔は  
我が罪を告白するこ  
と。廻心は心を変え  
て邪より正に移る  
事。

シテ いや其の実盛も。御前の池水にて鬢鬚(びんぴげ)を濯(すす)がれて候。執心残りけるか。今も此の辺の人には幻の如くに見え候ぞとよ。

深山木の其の梢とは見えざりし 源頼政の歌

ワキ そも幻に現るるとは。さて今も人に見え候か。  
シテ 深山木の其の梢とは見えざりし。桜は花に現れたる。老木をそれと御覽ぜよ。

ワキ 不思議やな実盛の。昔を聞きつる物語。人の上ぞと思ひしに。身の上なりける不思議さよ。さてはおことは実盛のその幽霊にてましますか。我実盛が幽霊なるが。魂は冥途に在りながら。魄は此の世に留まつて。猶執心の闇浮の世に。

ワキ 二百余歳の程は経れども。

シテ 浮みもやらで篠原の。

ワキ 池のあだ波夜と無く。

シテ 昼とも分かで心の闇の。

ワキ 夢ともなく。

シテ 現とも無き。

ワキ 思をのみ。

シテ 篠原の草葉の霜の翁さび。

同音 草葉の霜の翁さび。人な咎めそかりそめに。現れ出でたる実盛が名を洩らし給ふなよ。亡き世語も恥づかしとて。御前を立ち去りて。行くかと思れば篠原の。池のほとりにて姿は。幻となりて失せにけり。幻となりて失せにけり。

ワキ 篠原の池のほとりの法の水。池のほとりの法の水。深くぞ頼む称名の。声澄み渡る申の。初夜より後夜に至るまで。心も西へ行く月の。光と共に曇り無き。鐘を鳴らして夜もすがら。

シテ 南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。

シテ 極楽世界に入りぬれば。永く苦海を越え行きて。輪廻の故郷隔たりぬ。歡喜の心いくばくぞ。所は不退の所。命は無量寿仏となう。あら頼もしや。念々相續する人は。

同音 念々毎に往生す。

シテ 南無といつぱ。

同音 即ちこれ帰命。

シテ 阿弥陀といつぱ。

同音 其の行此の義を以ての故に。

シテ 必ず往生得べしとなり。

同音 有難や。

ワキ 不思議やな白みあひたる池の面に。見ればありつる翁なるが。甲冑を帶し来りたり。

シテ 埋木の人知れぬ身と沈めども。心の池の云ひ難き。修羅の苦患の数々を。浮かめてたばせ給へとよ。

ワキ これほどにまのあたりなる姿言葉。余人は更に見も聞きもせで。唯上人のみ明らかに。

ワキ 見るや姿も残んの雪の。

シテ 鬢鬚白き老武者なれど。

初夜、後夜 一昼夜を六つに分けて念仏をする。昼は晨朝、日中、日没、夜は初夜、中夜、後夜。

輪廻の故郷 生死流転する迷界、六道。殊にこの娑婆世界を指す。

不退の所 再び迷界に退転する事のない極楽世界。

無量寿仏 元は阿弥陀仏の事。「命は無量(無限)」「ついでついでを阿弥陀仏とかけた。

念々相續する 常に絶えず念仏を称える者は念仏毎に往生できる。

南無といつぱ 南無とは帰命という意味で願いの心を表し、阿弥陀とはこの願いを入れて衆生を往生させる修行を助け給う意味である。だから南無阿弥陀仏と称えることで願と行が一致して必ず極楽往生が出来ることとなる。

ワキ

其の出で立ちは華やかなる。

シテ

装（よそおい）殊に曇り無き。

ワキ

月の光。

シテ

燈火の影。

同音

暗からぬ夜の錦の直垂に。夜の錦の直垂に。萌黄匂の鎧着て。黄金作りの太刀刀。今の身にてはこれとても何か宝の。池の蓮の。台こそ宝なるべけれ。げにや疑はぬ。法の教は朽ちもせぬ。黄金の言葉重くせば。などかは到らざるべき。などかは到らざるべき。見申せば猶も輪廻の姿なり。その執心の振捨てて。弥陀即滅の台に到り給ふべし。

シテ

げにや一念弥陀仏即滅無量罪。

同音

即ち回向発願心。心を残す。事勿れ。

シテ

時到つて今宵遇ひ難き御法を受け。

同音

慚愧懺悔（ぎんぎさんげ）の物語。猶も昔を忘れかねて。忍に似たる篠原の。草の蔭野の露と消えし有様語り申すべし。

シテ

さても。篠原の合戦破れしかば。源氏の方に手塚の太郎光盛。木曾殿の御前に馳せ参じ申しけるは。光盛こそ奇異の曲者と組んで首取つて候へ。大将かと見れば続く勢も無し。また葉武者かと思へば錦の直垂を著たり。名宣れ名宣れと責むれども終に名宣らず。声は坂東声にて候ひしと申せば木曾殿。あつぱれ長井の斎藤別当にてやあるらん。それならば義仲が上野にて見し時。鬢鬚の糟斑（かすう）なりし今は定めて白髪たるべきに。黒きこそ不審なれ。樋口の次郎は見知りたるらんとて召されしかば。樋口参り。唯一目見て涙をはらはらと流いて。あな無慙やなこれは。斎藤別当にて候ひけるぞ。実盛常に申ししは。六十に余つて戦せば。若殿ばらに争い先を駆けんも大人気無し。又老武者とて人々に。あなづられんも口惜しかるべし。鬢鬚を墨に染め。若やぎ討死せんずる由。常々申し候ひしが真に染めて候ひけり。洗はせて御覧候へと。申しも敢えず首を持ち。

同音

御前を立つてあたりなる。この池波の岸に臨みて。水の緑も影映る。柳の糸の枝垂れて。気霽れては風新柳の髪を梳り。水消えては。波旧苔の鬚を洗ひて見れば。墨は流れ落ちてもとの。白髪となりけり。げに名を惜しむ弓取は。誰もかくこそあるべけれや。あら優しやとて皆感涙をぞ流しける。又実盛が。錦の直垂を著ること私ならぬ望なり。実盛都を出でし時宗盛公に申すやう。故郷へは錦を衣て帰るといへる本文あり。実盛生国は。越前の者にて候ひしが。近年御領に附けられて。武蔵の長井に居住仕り候ひき。此度北国に。罷り下りて候はば。定めて討死仕るべし。老後の思ひ出これに過ぎじ。御免あれと望みしかば。赤地の錦の直垂を下し賜りぬ。

シテ

然れば古歌にもみみじ葉を。

同音

分けつつ行けば錦衣て。家に帰ると。人や見るらんと詠みしも。この本文の心なり。されば古の。朱買臣は錦の袂を会稽山に翻し。今の実盛は名を北国の巷に揚げ。隠れ無かりし弓取の。名は末代に有明の。月の夜すがら。懺悔物語申さん。げにや懺悔の物語。心の水の底清く。濁りを残し給ふなよ。

萌黄匂の鎧、黄金作りの太刀刀平家物語にも語られる実盛の出立ち。

一念弥陀仏即滅無量罪  
一度南無阿弥陀仏と  
称えれば数限りない罪  
を消え失せる。

回向発願心  
自分の善根を仏に回向して極楽に生まれることを願う心。

手塚太郎光盛  
義仲の臣下。  
坂東声  
坂東訛り

樋口次郎  
樋口兼光。  
義仲を養育した中原兼遠の子。  
今井兼平、巴御前の兄と言われる。

気霽れては  
和漢朗詠集都良香の句。  
元々は柳の枝を髪に喩え、苔を鬚に喩えたものだが、ここでは逆に髪を柳に鬚を苔に喩えた。

朱買臣  
これ以降平家物語の実盛の段を引く。

シテ

その執心の修羅の業。廻り廻りて又ここに。木曾と組まんとたくみしを。手塚めに隔てられし。無念な今もあり。続く兵誰々と。名宣る中にもまづ進む。

同音

手塚の太郎光盛が。

シテ

郎党は主を討たせじと。

同音

かけ隔たりて実盛と。

シテ

押し竝べて組む所を。

同音

あつぱれおのれは日本一の。剛の者とぐんでうづよとて。

シテ

鞍の前輪に押し附けて。首掻切つて捨ててげり。其の後手塚の太郎。

同音

実盛が弓手に廻りて。草摺りを畳揚げて。二刀刺す所をむずと組んで

二匹が間に。どうど落ちけるが。

シテ

老武者の悲しさは。

シテ

戦には為勞（しつか）れたり。風に縮める枯木の力も落ちて。手塚が下になる所を。郎党は落ち合ひて。終に首をば掻落とされて。篠原の土となつて。影も形も亡き跡の。影も形も南無阿弥陀仏弔ひてたび給へ。跡弔ひてたび給へ。